

教育研究業績書

令和 3 年 3 月 31 日

氏名 増田 翼 印

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1) メレル・ヴォーリズと一柳満喜子	共訳	平成 22 年 11 月	水曜社	本書は、ボストンのジャーナリスト Grace Nies Fletcher が、関係者から取材し執筆した The Bridge of Love(E.P. Dutton and Co, Inc., 1967) の訳書である。カンザス生まれの貧しい青年(メレル・ヴォーリズ)と日本人の華族令嬢(一柳満喜子)の運命的な出会いと生涯が綴られている本書の第 2 章から第 4 章(23-79 頁)の翻訳を担当した。
2) 日中教育学対話 III——新たな対話への発展・深化を求めて	共著	平成 22 年 12 月	春風社	日中両国の様々な教育学的課題を対話によって鮮明にしようとした本書において、第 14 章「〈旧教育〉から〈新教育〉への転換を意図する教育者たち——群馬県における大正新教育運動への道程およびその展開を中心に」(345 - 380 頁)の執筆を担当した。ここでは、明治末期から大正期にかけての群馬県教育者たちが主張した種々の教育論において、画一的、注入主義的なヘルバルト主義的教育(旧教育)への賞賛が、やがて稟性(個性)や自発性を有する子どもの学習へと目を向けようとする〈新教育〉の支持へと転換していくその様相を捉えようとした。またこうした作業を通じて、教育論があれかこれかの二項対立に陥りやすい点、あるいは教育改革運動が教育の本質を追究するものとなりにくい点、などを指摘した。
3) 斎藤喜博教育思想の研究(佛教大学研究叢書)	単著	平成 23 年 3 月	ミネルヴァ書房	斎藤喜博(1911-1981)の教育思想の変遷を、社会的、文化的、教育的背景との連関を念頭に置き見ていくことで、〈初期〉では完成体への援助を目指す消極的な人間観・教育観を潜在させていた思想が、〈後期〉では到達点をあらかじめ定めず、不断の更新、無限の躍進を企図する積極的な人間観・教育観を潜在させるように変化したという点を浮き彫りにした。また、こうした思想の変遷に伴い、〈初期〉では子どもと教師とを主客分離の関係として捉えていたのが、〈後期〉に至り間主体的な把握へと変化したという点に彼の思想の特質と意義を見出した。
4) 保育者のためのキャリア形成論	共著	平成 27 年 2 月	建帛社	「保育者にとってキャリアとは何か」「保育者の専門性を高めていくとはどういうことか」について考察する本書において、第 2 章「保育職を選択するという事」(11 - 18 頁)の執筆を担当した。この章は、小中学校・高等学校において児童・生徒がどのように保育職と出会うのか

				という点を見ていながら、保育者養成校で学ぶ学生自身の職業選択の意味について問い直す内容となっている。
4) 新・保育実践を支える 保育の原理	共著	平成 30 年 2 月	福村出版	第 14 章「保育思潮の変遷と子ども観（日本）」を執筆。近代教育制度の成立に伴い開設された東京女子師範学校附属幼稚園を皮切りに、日本国内に幼稚園が普及していく過程、ならびに救済事業としての託児所（保育所）が求められていく過程を中心に、日本の保育・幼児教育の歴史を概観したもの（pp. 183 - 197）。 吉田貴子、水田聖一、生田貞子、北後佐知子、加藤望、野口隆子、広瀬美和、境愛一郎、中村恵、増田翼、ほか
5) いまがわかる教育原理(シリーズ知のゆりかご)	共著	平成 30 年 4 月	みらい	第 10 章「教育行政および学校経営の基礎」を執筆。教育行政の基盤にある法的枠組みとして、日本国憲法、教育基本法、学校教育法等関係法令に触れるとともに、保育・幼児教育行政の今後について論じた。加えて、「規制緩和」「地方分権化」に伴う近年の学校経営改革（開かれた学校づくり）と「チーム学校」についてまとめた（pp. 130 - 141）。 西本望、井谷信彦、猪熊弘子、大倉健太郎、尾場友和、久保田健一郎、増田翼、ほか
(学術論文) 1) 斎藤喜博における人間観と教育観 (修士論文)	単著	平成 19 年 3 月	佛教大学	斎藤喜博に関する先行研究には、彼の教育実践の内容をまとめるものや、授業を分析するものが少なくない。しかし、これでは斎藤喜博を断片的に見るにとどまるだけで、彼の人間そのものを総合的に見たことにはならない。そこでこの研究では斎藤における人間観と教育観の解明を通じて、一人の人間としての斎藤喜博の全体像を浮き彫りにすることを目的とした。具体的には彼の生涯における人間観の変遷に応じて時期区分を設け、その移り変わりを捉えるとともに、こうした人間観が教育観へどのように反映したのかを見ていった。
2) 『教室愛』における斎藤喜博の人間観	単著	平成 19 年 6 月	『関西教育学会年報』通巻 31 号 (41-45 頁)	斎藤喜博の処女作『教室愛』(1941) が書かれた〈初期〉斎藤の人間観と、島小学校に代表される後の斎藤の人間観とは性格が異なることを明らかにした。また、〈初期〉斎藤の人間観が形成されるに至る背景として、当時の内向的、独我的で弱々しく、30 代まで生きられたらそれによいと考えていた斎藤の境涯や、当時の教育的背景について見ていった。
3) 斎藤喜博教育思想の基底としての前半生 (I)	単著	平成 20 年 3 月	『佛教大学教育学部学会紀要』第 7 号 (225-235 頁)	斎藤喜博の教育思想の基底に横たわる前半生での〈基礎経験〉に着目し、それらが、どのように彼の教育思想の独自性や特質へとつながるのか、はたまた教育思想の展開を制約し限界づけてしまうのかを解釈学的に捉え直そうとした。本稿 (I) では、彼が生まれ育った上州という土地に存する固有の風土について取り上げ、幼児期、児童期の斎藤が、利根川や川辺の自然に浸りきった生活のなかで、種々の予感 (Ahnung) や憧憬 (Sehnsucht) を抱くことで、

4) 東井義雄の人間観・教育観にみられる仏教思想	単著	平成 20 年 3 月	『日本仏教教育学研究』第 16 号 (141-145 頁)	自分を超越していく体験を多くしたのだと考察した。 東井義雄 (1912-1991) における人間観・教育観を明らかにするなかで、その根底に横たわっている仏教思想の存在について考察した。その際、斎藤喜博の人間観・教育観との比較を試みることによって、斎藤においては、子どもの可能性を引き出すという教師の自力的で創造的な面を強調する人間観・教育観が支持されているのに対して、東井においては、〈生かされている〉という種々のつながりを重視する人間観・教育観が支持されている点を明らかにした。
5) 斎藤喜博における理論と実践の捉え方 (査読付)	単著	平成 20 年 6 月	『関西教育学会研究紀要』第 8 号 (34-47 頁)	斎藤喜博における理論・実践関係の構造把握の特徴は、①〈人間の豊かさ〉が理論と実践の相補的關係を成立させると強調し、②タクトが発現するための条件を、理論と実践の蓄積の結果生じる〈カンや洞察力〉が教育者＝人間に備わっているかどうかに見ている、という以上二点にあることを見出した。さらに、教育者のタクトは如何にして形成され磨かれていくのかという点について、この研究では、タクト (技能) そのものに焦点を当てるだけでなく、〈人間の豊かさ〉も併せて涵養していくような教員養成の在り方を考える必要があると提言した。
6) 中期斎藤喜博における人間観・教育観	単著	平成 20 年 6 月	『関西教育学会年報』通巻 32 号 (1-5 頁)	終戦後、〈初期〉斎藤喜博の人間観・教育観が、彼の生活の変化や生活そのものとの関いを通じて次第に変化し、〈中期〉の性格を表し始める点を明らかにした。具体的には、彼が生家から離れ所帯を持ち、貧しい中にも守るべきものができたという点、また教員組合運動に参加し、さらには常任執行委員文化部長として、学校外にも目を向け始めたという点が、無数の軋轢に挟まれて生活せざるを得ない人間の現実の把握と、そうした抑圧状態からの解放という理想とを統一させ、〈中期〉の性格へと変化していったのであると結論づけた。
7) 斎藤喜博において「無限の可能性」とは何を意味したのか	単著	平成 20 年 8 月	『日本教育学会大会発表要旨集録』67 (80-81 頁)	斎藤喜博が「無限の可能性」という言葉を語り出すまでの軌跡を辿ることで、彼においてこの言葉が何を意味したのかという点を明らかにした。また、「無限の可能性」という言葉の誕生には、1960 年前後の時代背景が緊密に関係しているのではないかとこの点について、いくつか例証を試みた。
8) 斎藤喜博教育思想にみられる「無限の可能性」という言葉について (査読付)	単著	平成 21 年 3 月	『佛教大学大学院紀要』教育学研究科篇、第 37 号 (19-36 頁)	斎藤喜博における「無限の可能性」という言葉について、その誕生過程を明らかにするとともに、彼における「無限の可能性」という言葉の意味内容について詳察した。とりわけ、この研究では、教育事象を論じる際の〈論じ方〉に着目する教育社会学的な観点も取り入れながら、「無限の可能性」を一つの「教育言説」として捉え返そうと試みた。その結果、「無限の可能性」という「教育言説」誕生には、1960 年前後の時代背景が緊密に関連しており、なかでも、当時、一種の標語 (スローガン) としてこの言葉が多く喧伝されていた点を明らかにした。
9) 斎藤喜博教育思想	単著	平成 21 年 3 月	『佛教大学教	(I) に続いて本稿 (II) では、斎藤喜博の前

の基底としての前半生(Ⅱ)			教育学部学会紀要』第8号(139-150頁)	半生における、家族からの影響と、幼児期、児童期の齋藤について考察した。特に、齋藤少年が十分に温かな家族の愛に生まれ、信頼の世界の内に存在し得たこと、さらに、そうした〈被包感〉に支えられた結果、周囲の様々な事象に人一倍関心を寄せながら成長し得た点を浮き彫りにした。また、内気で、自分に引け目を感じ、一人で過ごすことの多かった幼児期、児童期の齋藤が、どのような世界のなかに生きていたのか、またその世界のなかで彼が何を求めて生きていたのか、という点を明らかにした。
10) 東井義雄の「教育実践の一般化・科学化」論	単著	平成21年3月	『日本仏教教育学研究』第17号(88-92頁)	東井義雄の論考「教育実践の一般化・科学化」(1959)を中心に見ていながら、教育実践の〈一般化・科学化〉という問題に対して、仏教者である東井がどのような考え方を示したのかを浮き彫りにした。特に、当時の教育者たちが、教育の〈一般化・科学化〉とは、原理原則や法則性を見出すことだと考え、合理性や普遍性を追求しようとしたのに対して、東井は、矛盾と知りながらも「熱」や「喜び」を消失しないような記述を通して教育の〈一般化・科学化〉を目指そうとした点を明らかにした。
11) 後期齋藤喜博における人間観・教育観	単著	平成21年6月	『関西教育学会年報』通巻33号(1-5頁)	〈初期〉から〈中期〉を経てきた齋藤喜博が、教師生活30年目の1960年に刊行した『未来誕生』において、「教育は……無限の可能性を子どものなかから引き出すことに本質がある。どの子どももが、持っている力を、十分に伸ばし発展させるとともに、子どものなかにないものをもつくり出させ、引き出してやることこそが、教育における本質的な作業である」と述べた一節を中心に、〈後期〉齋藤の人間観・教育観の特質を考察した。
12) 齋藤喜博の教育思想に関する研究—その変遷ならびに特質と意義—(博士論文)	単著	平成22年3月	佛教大学	齋藤喜博の教育思想の変遷を、社会的、文化的、教育的背景との連関を念頭に置き見ていくことで、〈初期〉では完成体への援助を目指す消極的な人間観・教育観を潜在させていた思想が、〈後期〉では到達点をあらかじめ定めず、不断の更新、無限の躍進を企図する積極的な人間観・教育観を潜在させるように変化したという点を浮き彫りにした。また、こうした思想の変遷に伴い、〈初期〉では子どもと教師とを主客分離の関係として捉えていたのが、〈後期〉に至り間主体的な把握へと変化したという点に彼の思想の特質と意義を見出した。
13) <子どもの可能性>という見方の出現—1950年代後半から1960年代前半にかけての教育論を中心に—	単著	平成22年6月	『関西教育学会年報』通巻34号(31-35頁)	50年代後半から60年代前半にかけての日本における種々の教育論の中で、〈子どもの可能性〉という見方が広く普及していく様子を、教育事象の〈論じ方〉に着目する教育社会学的な観点も取り入れながら、以下三つの系譜に従って考察した。①能力別教育を批判する際の理論的根拠(能力の固定性を否定、子どもの無限の可能性を信じる)、②権力的教育排除と創造的教育の展開を推進するスローガン(子どもの可能性の伸長こそ教育者の役目、教育者の責任)、③ソビエト教育学、心理学からの影響(生得的自然性と環境との相互作用を強調)。
14) 日本と中国にお	単著	平成23年3月	『仁愛女子短	中国からどのような子ども観、子育て観が日本

ける幼児教育思想 交渉史—先秦代から 明代における中国 幼児教育思想の 根本原理—			期大学研究紀 要』第 43 号 (51-59 頁)	への伝播したのかを詳らかにすることを研究 の目的としたうえで、その基礎的作業として、 先秦代から明代における中国幼児教育思想の 根本原理を中心に見ていった。とりわけ〈慎始〉 という根本原理が胎教思想や環境重視の早期 教育論へとつながっていったことを明らかに した。
15) 福井県における 大正新教育運動に 関する研究	共著	平成 24 年 3 月	『仁愛女子短 期大学研究紀 要』第 44 号 (39-48 頁)	福井県私立教育会発行の『福井県私立教育會雜 誌』・『福井縣教育會雜誌』や福井県教育会発行 の『福井縣教育雜誌』・『福井縣教育』、あるいは 福井県教育会と福井県自治協會共同発行によ る『教育と自治』の記事内容を中心に見ながら、 当時の福井県教育者らが、〈旧教育〉に対して自 ら〈新教育〉を表明し転換を図ろうとするその 様相を、つまりどのように〈旧教育〉を批判、 否定するという立場を確立し、自らの考えを 〈新教育〉の内部に位置づけていくのかという 点を明らかにした。 共著者名：増田翼、松川恵子
16) 福井県における 戦前の保育の動向 について(1)	共著	平成 24 年 3 月	『仁愛女子短 期大学研究紀 要』第 44 号 (49-55 頁)	福井県における明治 20 年代から第二次世界大 戦前までの保育の動向について、各保育施設の 系譜を捉えることを研究の目的としたうえで、 今回は福井県で一番初めに設立されたとされ る小浜尋常高等小学校附属保育科の沿革に焦 点を当てた。 共著者名：松川恵子、増田翼
17) 勝山市における保 幼小連携の実践に ついて	共著	平成 24 年 4 月	『日本保育学 会第 65 回大 会要旨集』(467 頁)	福井県内の保幼小連携の取り組みへの助言的 参加経験を踏まえ、連携を進めていく立場にな った現場保育者の意識変容過程について注目 したもの。保幼小連携の実践者が〈連携の意義・ 目的〉に対する自分の意識をどのように変容さ せ、また〈連携の課題〉をどのように克服する のか、というプロセスに着目した結果、計画・ 準備・打合せ等の日程確保が難しく、実践者同 士の有意義な交流にまで至っていない現状が 明らかになった。 共著者名：増田翼、松川恵子
18) 福井県における 大正新教育運動へ の道程およびその 展開	単著	平成 24 年 6 月	『関西教育学 会年報』通卷 36 号 (26-30 頁)	明治末期から昭和初期にかけての福井県にお いて、〈旧教育〉から〈新教育〉への転換が如何 にして起こったのかを明らかにした。特に今回 は、当時の福井県内の大多数の教育者に新教育 思想がどのように広まったのか、という〈普及 過程〉に焦点を当てた。
19) 丹澤美助の〈新注 入主義教育〉に関す る一考察	単著	平成 25 年 3 月	『仁愛女子短 期大学研究紀 要』第 45 号 (53-62 頁)	昭和初期にかけて「新注入主義」を提唱し、当 時の日本教育界全体に多くの反響と論争を巻 き起こした丹澤美助(1880-1968)の思想と生涯 に焦点を当て考察した。
20) しつけ研究の系 譜と課題	単著	平成 26 年 3 月	『仁愛女子短 期大学研究紀 要』第 46 号 (73-82 頁)	2013(平成 25)年までのおよそ 100 年間に日本 で出されたしつけ研究を対象に、その系譜を① 民俗学、②心理学、③社会学、④教育学という 区分にしたがって描き出すとともに、その作業 から見えてくるしつけ研究における課題につ いて論じた。

21) しつけ方略の分類に関する一考察	単著	平成 26 年 4 月	『日本保育学会第 67 回大会要旨集』(855 頁)	先行研究におけるしつけ方略の分類傾向を示すとともに、未だ着目されていないしつけ方略の新分類について、とりわけ「虚構因果型」「交渉型」を取り上げながら考察した。
22) なぜ「しつけ」に悩まされるのか	単著	平成 27 年 4 月	『仁愛女子短期大学研究紀要』第 47 号 (57-66 頁)	しつけを〈事後統制〉と〈事前統制〉という二つの「社会統制」手法から捉え直すことで、〈しつけに悩まされる〉という現象について考察した。また論の最後では、しつけに悩まされないために、今を乗り切りその場をやり過ごすための〈環境統制〉という手法が広がりつつあるのではないかと警鐘を鳴らした。
23) しつけ研究の課題を再検討するーしつけ研究の成果はしつけ手に届いているのかー	単著	平成 28 年 4 月	『仁愛女子短期大学研究紀要』第 48 号 (59-68 頁)	①しつけ手を取り巻く環境とはいかなるものなのか、②しつけ研究の成果はなぜ活かされていないのか、という 2 点について見ていくことで、これまでのしつけ研究の〈枠組み〉やしつけ研究者自身の〈姿勢〉を根底から問い直すことを試みた。
24) リスク回避型社会における「安全教育」の意義について	単著	平成 29 年 4 月	『仁愛女子短期大学研究紀要』第 49 号 (91-100 頁)	子どもにとって「安全」とは何であるか、さらには子ども自らの安全意識を高めるための「安全教育」はどうあるべきかについて考察した。とりわけ、危険を子どもから遠ざけることが当然の社会＝リスク回避型社会にあって、「安全教育」のもつ意義とは何かについて議論をまとめた。考察の過程においては、「学校安全」における「安全教育」「完全管理」について、また保育現場における危機管理等含めた「安全教育」「安全管理」について、各家庭でのしつけのなかに見られる「安全教育」「安全管理」に触れている。
25) 保育者養成課程における教科目「教育原理」の位置づけと役割について	単著	平成 30 年 2 月	『仁愛女子短期大学研究紀要』第 50 号 (pp. 97-105)	教職課程および保育士養成課程というカリキュラムの二元性を意識した授業設計が求められる教科目「教育原理」の位置づけや役割について考察した。特に、受講学生たちが小学校以降の学校教育とは異なる保育・幼児教育の独自性をいかに学んでいくのか、という点に焦点を当てて論を展開した。
26) 保育者養成校を取り巻く現状と本学における課題	単著	平成 30 年 3 月	『福井県内保育者対象アンケート調査研究報告書』(pp. 2-12)	福井県内保育者を対象に実施したアンケート調査結果をまとめるに当たり、ここ数年、様々な改革が迫られている保育者養成校の現状と、本学幼児教育学科特有の課題について整理した。
27) 高校・養成校・保育現場をシームレスにつなぐ育成環境の構築に向けて：「教員育成指標」作成事例を手がかりに	単著	平成 31 年 5 月	『仁愛女子短期大学研究紀要』第 51 号 (pp. 59-69)	保育者養成校を取り巻く課題の解決に向けて、高校ー養成校ー保育現場という三者間を切れ目なくつなぐことの意義を考察した。また、接続時に生じるギャップを少しでも解消するために、保育職志望段階から現場保育者（管理職段階）に至るまでの継続的発展的「キャリア・ルーブリック」を開発するために、留意点などを「教員育成指標」作成事例を手がかりにしながらまとめた。

28) 保育学における理論=実践問題としての保育者の専門性：日本保育学会第72回大会における自主シンポジウムの記録	共著	令和元年10月	『国際研究論叢：大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部紀要』33(1) (pp.95-111)	102-105頁の「地方小規模短大における保育の〈理論・実践〉問題の捉え方：今後の保育者育成環境を考える」の執筆を担当した。 久保田健一郎、濱中啓二郎、吉田直哉、田口賢太郎、増田翼、稲井智義
29) 保育学における理論=実践問題としての保育者の専門性の追求—日本保育学会第72回大会における自主シンポジウム後半の記録：問題の討議と深化—	共著	令和2年2月	『新渡戸文化短期大学学術雑誌』第10号 (pp.23-34)	日本保育学会第72回大会の自主シンポジウムにおける討議内容を文章化したもの。27-28頁にわたる部分で、ブランディング事業の課題等に触れた自らの発言内容をまとめた。 濱中啓二郎、久保田健一郎、吉田直哉、田口賢太郎、増田翼、稲井智義
30) 保育職への接続・適応に関する先行研究の系譜と課題(1)—保育職志望段階に着目して—	単著	令和2月3月	『仁愛女子短期大学研究紀要』第52号 (pp.63-73)	保育職を志望する段階(高校生)の現状を明らかにするために、この点に関する先行研究の系譜と課題をまとめた。
31) 人口減少地域において保育職への接続・適応をどう考えるべきか—『円滑な移行の促進』がもたらすメリットとデメリットについて—	単著	令和2月8月31日	『関西教育学会年報』通巻44号(116-120頁)	令和元年11月の学会にて口頭発表を行った内容を精査し、加除修正したうえで論文化したものの。ブランディング事業で目指しているルーブリック開発のメリットと想定されるデメリットについてまとめた。
(その他) 1) いのちにふれる	単著	平成20年3月	『啐啄』第11号、京都文教短期大学照屋研究室(4頁)	東井義雄を紹介したコラム。子どもは、「いのちにふれてくれるものがないことが、どんなにさびしいことであり、いのちにふれてくれるものを見出すことが、どんなに元気の出ることなのかを、訴えている」と語る東井においては、そもそも〈いのちといのちがふれあう〉ことこそが、人間形成を育む根本の力だと捉えられていた、と紹介した。
【口頭・ポスター発表】 2) Transition Issues in Japanese ECEC Professional Development.	単独	2019.9.6.	OMEPA Asia Pacific Regional Conference 2019 in KYOTO, JAPAN.	保育学に関する国際組織(OMEPA)が主催するアジア太平洋地域会議において研究ブランディング事業を紹介するポスター発表を行った。
3) 人口減少地域に	単独	令和元年11月16	関西教育学会	円滑な移行を促進あまり見失われるものがあ

<p>において保育職への 接続・適応をどう考 えるべきか—『円滑 な移行の促進』がも たらすメリットと デメリットについ て—</p>		日	第 71 回大会、 関西学院大学	<p>るのではないかと、という問題意識のもと、その メリットとデメリットについてまとめ発表し た。</p>
<p>4) 保育の原理はな ぜ伝わらないのか ～遊びよりも勉強・ 習い事を重視する 風潮にどう向き合 うか～</p>	単独	令和 2 年 3 月 1 日	日本保育者養 成教育学会第 4 回大会、福山 市立大学	<p>遊び中心、環境を通して行う保育、といった保 育の原理が保護者に伝わらないのはなぜか、ま た保育現場においてどうすれば保護者に伝え られるのか、について考察しポスター発表にま とめた（コロナ感染症の影響で学会中止に）。</p>
<p>5) 保育者の職能を論 じる際の用語の混 乱について ～「資質」「能力」「専 門性」をどう使い分 けるか～</p>	単独	令和 2 年 5 月 16 日・17 日	日本保育学会 第 73 回大会、 奈良教育大学	<p>〈ある職務を遂行するうえで必要とされる要 件〉を表す用語としての「資質」「能力」「専門 性」の違いを詳らかにすることを目的に、この 3 語の保育・教育界における経緯についてまと めた（コロナ感染症の影響で学会中止に）。</p>
<p>6) コロナ禍での「教 員免許状更新講習」 「現職者研修」オン ライン化の試み：福 井県の事例</p>	単独	令和 2 年 12 月 6 日	日本乳幼児教 育・保育者養 成学会 / 保育 教諭養成課程 研究会 第 1 回研究大会	<p>新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点か ら「教員免許状更新講習」や「現職者研修」を オンライン化したことに伴うメリット・デメリ ットや様々な課題について事例報告を行った。</p>